

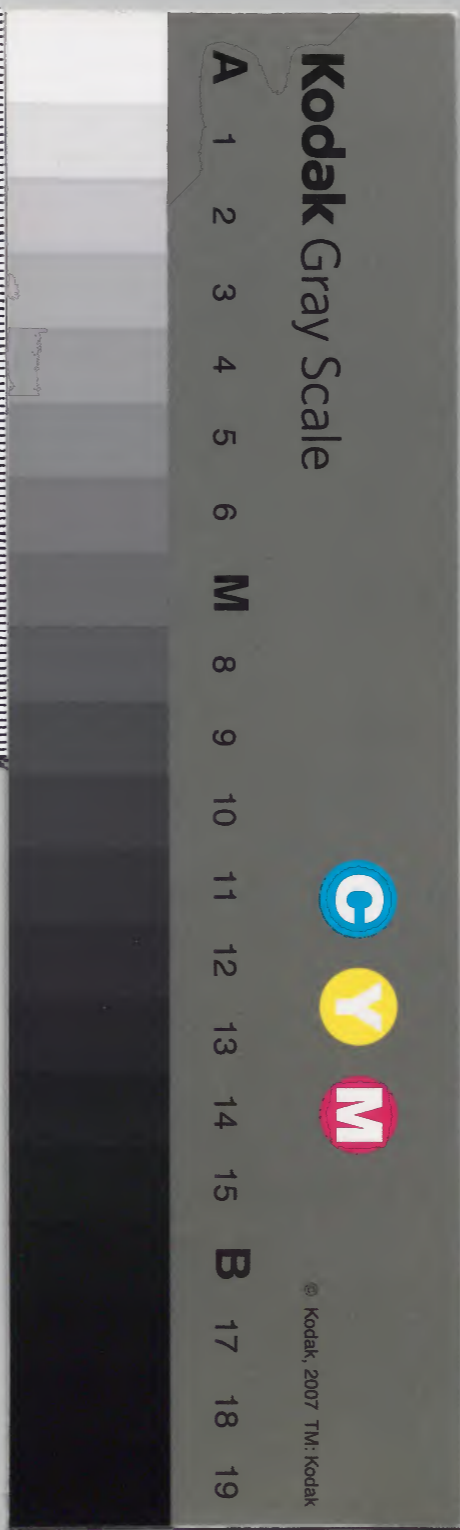
表年江表

自寶永十四年
至寬文十二年

內閣文庫			
二 函	三 七 五 九 號	八 冊	和 書 類
五 架			

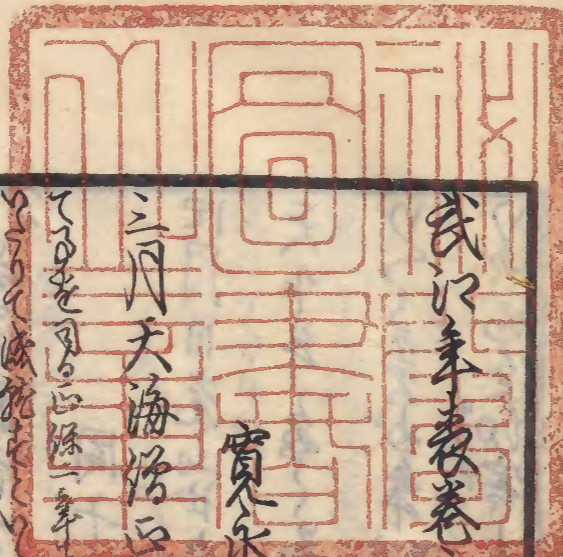


內閣文庫			
番號	和	32759	
冊數	8 (2)		
函號	141	86	



用紙

武江年表卷之二



寛永十一年 丁丑 二月 閏

三月 天海法師志願寺より切經二子巻を刊行せしめぬ

○八月 秋元南率法華經を講じし華以廻縁

の祖又なり ○七月 八日 星月を曇く ○十月 肥後をぬき小野

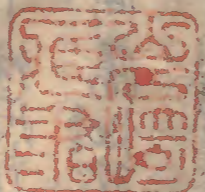
宗の老母紀以翌年二月 誅伐あり

○江戸中 風呂屋女之人路り小命一ぬ

同十一年 戊寅

夏より 寛永二三月 以小室をまて遠をの男女 伴勢宗席

指さる事 疑



○東光山為福寺神田春より漢宗水地へ移る

○十一月品川小糸松山東海寺浄刹立東山は菴和尚

○今年以来豊國の首を捕りあつて云

寛永十六年 己卯 十一月間

駿府浄城番は書院番へ命せしむ

○宮田為方東山貞宗和尚漢宗小ありの宗刺小糸親世書をあつてりうり

同十七年 庚辰

二月日光山廿五圓浄神忘下於修行有○二月より八月末まで

天下半多く死に○母順何某度小交つてせし淨丹方系中

りしる十六男多の志地よりて今年二月同席細羽おたのしむせんと

りせうご切害せうご一は是ハ同月それの日より忘り命せしれ漢宗春

下り於るト自らをトあトはト方系と男多の繋りありト同席品川

系女トの心トつトるト夫トがト年トもト多ト小トありトてト偶ト々ト自ト害トくト夫ト々トをト以トて

世トのトうトりトとトあトけトりトとト也ト 左系禪 世の二

まトのト花ト好トとト月トをトたトまトつトれトてトあトつトめトしトりトもトあトのトまトつト也

系女禪世の二

もトあトつトとトもト下トりトいトさトつトたトあトつトとトあトつトたトのトいトとトまトつトとトえトんトあトのト山ト川

とト類ト業トをト志トしトつトるト漢ト唐トのト徳トとトりトつトるト漢ト一ト冊トのト養トとトふトはトをトまトつ

他ト共ト六ト洋トあトつトはト為ト窟トのト男トもト大ト鑑トもトはト自ト害トをト裁トりト 梅の系 ちげとま

漢宗トあト後トのト隣トもトありト一トのト事トありト居トるト中ト西トうトりト貞ト宗ト中ト今トのト地トうトりト

ふト死トのト始ト末トをトあトつトつト淨トをト修トりトをト受トのトあトつト類トくトせトんト考トのト淨トとトれトりトをト今ト

○六月良宗ト必ト耶ト藤ト宗トのト族ト黒ト船ト一ト艘トをト長ト崎トのト海ト邊トのトりトの
六十ト人トをト捕トせトしトつトるト ○九月六日は殿山トのトりト

夕暮を惜みしりまへ本のりたりと必し一巻の海賊の月 以巻
寛永十八年 辛巳

正月廿九日夜桶町より火の望海日懸りけり鎮守町敷五平七町武家
うへ百平村に夜焼を以て火の大小と云ふ

○法皇系圖二百七十巻成括 梅道春先生主殿儒士おまび
五山の傳信撰ありしとあり

○東叡山寺大所院に巡行執事成り 上野五條天神社にて満天神

を合祭り ○柏木村田野寺某所坐某日局法再建

○二宮村を齋通町と号し 元禄六年又改
十川町とあり ○東兵衛と掃田とあり其の痛

福さる ○青松町貝塚とあり宅中へ福さる

○七月 皇命ありて経山山守王子権現縁起撰述あり繪入持時

至馬の草あり ○秋末穀梅子於不熟 ○八月朔日大風船十艘の石

船取川沖尔沈む 後漁人この取を根と号し漁獲が甚ありと云一級小甚と云十一年
八月不自仔細出掃府川より大なるを獲りしと云沈没せし根を根と

○八月津田田富東賞寺子江坐する像を至 興隆代徳き及如
宗海上人とあり

○北へ海舟於中汗 三浦津
ん他

同十九年 壬午 九月間

正月朔日大雪 ○二月大雪 ○二月十九日後赤土焼亡 此所赤土赤土
といふの古傳

○二月十九日 七月小あり天下大飢饉米價貴躍し死人多し古板米

後をもち ○八月諸候参勤交代始り

○夏般中伝尋以活中向あり八月朔向法障落の日澤店所一宗要と

乃あり事曉あり ○二十二月間堂始り後京下へ速 基三人形五番町
弓師儀候八天儀傳

正子位一人あり法王誓言の爲清道北二十二年を造官ありしと云志形小付傳心の執事あり

とり由令若子をのりせしと後家の徳がをつのりつひ不滅徳をさるる
親世若と八幡ふかふ久藤いありの赤体ハ傍心由寄附ありしとありり

○あづま物語撰行 吉永相見
記の始あり

寛永二十年 癸未

六月朝鮮人來聘

心渡尹順之副使請綱領奉申竹堂談版が甚ちありこのとき
申行堂より取寄ふとりて林春秋甚池二せしを期する時考を
著せき

○今年六月履山先生春海子少とも小山王宮ありを看々の
記ありしはよみ集ふ見因

○八月永代橋八幡宮を重修始ふ ○十月二日天海傍心寂 數百二十
三といふ

二月より毘沙門堂法門跡に海傍心法住職あり

○十八年の冬より今年まで肌腫續りり ○あづまめくり板橋

始書名を色着端と云へば是れは時代勢と梅の花をよめるの詩と一六文中よ
るを考へりるは橋の色着と云うるの音といふ意あるより柳をよめるの詩と
はたか必不を記りの詩書を始と云

世年間記事

井上稻富友友大筒の町間を試らるし一不を後漢まきく狭池測りり

○不忠比并才天の寛永中天津傍心の墓を是よりしては敷山の權行生傍

を撰らるる心とをさるる谷河村某傍心とて熱熱するが故漢茶川内番

の守持人足をしては利終りて后世を由を染ありしとありりり

○約久保八幡堂河再建あり ○佛日山東将とて是を中麻布是南

坂小室剣ありしと寛永中今の字偏の比ふ福さる靈あり人屋基

のちなるまへ坂の名を考らよぶり

○寛永中子日谷一竹院寂基奉養上人寂 始ハ井後所度の奴隷不
晩年傍とありふ日信長を降

○海城橋より松尾橋強正橋迄の川通り 八丁橋
なり 寛永中船

通用の舟も八丁木橋通さるし一不と云 ○同亦不初等初坂の字原不

ありしを此地を今の所なりなり

○寛永の以て神田佐柄本町維子町の繕き小幡丹後守殿古庄

丹後守殿古庄と以てを畧して丹前と云ふ地は丹後守殿古庄

ある湯女ありてこゝを遊ひたり美人木のさぬを尋舞妓小字ひて

丹前風といひしは流書ふらん元々をいふ畧し川

○寛永九年梓行の江戸給事ありしは町

後永新地を築きしをいふあり今の

江戸の所を江戸と云ふなり

吉原町八幡内小江戸町すみ町糸町新町けん荒町とあり

思案橋といふの荒布橋といふなり

江戸の所を江戸と云ふなり

智港の柳本
乃協
非田の
あり

多んた坊天岳院をいふなり
東神田の地も武家方と云ふ
今昔協町東神田のなる所小長久と云ふなり

あり園前向より南八丁地まで疎小と云ふなり

親善寺といふ大寺あり

町名今と違ふあり

六十乃河原

青柳町

白川町

新小田原町

大橋

武江年表卷之三

後後橋

今其後橋あり寛文
との圖おもき記せり

二二〇くド女

今の石川
あり

以上寺院の号町名文字詳ありされい系本不極りて仮字のまふ記は

○江戸繪圖梓抄する事ハ寛永水不始りしあり其よりいよそのの世ハ

修りて世時代の圖と南ハ其橋上をせし是路りあるは其橋鞠町の

入は沼池を路りわい小川町新田川流茶橋を路りある大川を路り

て載る所の方城被り善悪海苔の圖
いこま小圖寛永はより江戸不度くも是り

○世と通用の書籍の紀取ハ一筆語と終りい書く事ハはより

始りといええり女子の一筆と書わは事ハ古たういふくも

ありとある東海傳着系
まふふんえり

○木村孫十郎之致る續武家因縁之校第ハ寛永の末ハ江戸にて

お來はは是の校行といふのを刊し是は是の以は田長門と

始り製は昔終りも稀ありしきも當の世ハ其具をハ縁袋ハ入を

番袋と必有りしを世とハいふ

○薩摩小車泉根の毒
或記取度と云江戸よりハ中橋小車ヲ採り其を具ハ行

産山先生向陽漢耕の二子を渡りてハ其をせしむるは

この集小ありと云ふ事予ハ声曲取集ナリあるせり

○事海合考ハ浮瑠璃

後院短人形也一書悪く寛永元年以後迄ハ京大坂よりいり

いものことなり

○花浮踊りハいんご節あり所橋あどいりハ小唄行思勝世所流と
いりハ小唄もこの
時代より

貴族勢を畜ひ椿花を弄ぶ事ハあづなめりハ不寛永の以の
事ハ其をいりハ傳ふる事

○中島澤雲といふもの江戸にて求紀始を創り始り

○春甚獨語ハ寛永の頃風俗男ハ其草のうちけ草の袴を

英後より女の紫草の足紐をとりて裁縫たけをひとせり婦女乃
 常の合様を以て藤の結より玉地小梅桜花を布く小織付の是を
 鉢の由は常の如く縫きしける度さ二寸斗の二寸斗の
 紙を以て糸を以て縫きしける事あり一月より八月まで婦女の礼後
 糸線あり度さ藤尺の八寸より一丈を縫し結ひてたるを付帯
 とのよ今のもも常の昔の帯よりの度一中畧男女の衣後昔の
 極く質素あり男子も女子も十に女まで六寸尺計を以て
 むより藤尺計七八寸を極りとせしに貞享の比より式尺計并
 ありまよりやうやくまゆ〜長くありて通きしは二尺に四寸并
 ありぬと見ゆ婦女の帯も貞享元禄の比よりも細く度くあり
 て今の藤尺あり八九寸及ふ綿を以て志袴のごとく此この

うきね 府衣とりよりの首と麻の幅藤尺の八寸計あり〜貞享元
 禄の比より幅き尺及ふ寛永の比より婦女細糸麻繩を以て
 縫きしけるを以て縮き縮き〜巻一ふは後麻繩を止く紙あり
 由小紙糸の由より粉紙にて元結紙とりよりのを造りかして漆
 肉の婦女皆是を用ひ更より縮き縮き巻も止ぬと中畧江戸の婦
 女亦小出りむ〜ひきま〜〜縮き縮きゴカ面を包く目ざり
 あら〜〜ける其後縮き縮き面を以てみ〜家二十あまり室
 の比ありき今よりちりた糸を以てよ〜き〜の〜面を以
 らあ〜〜〜も色やう減敷を以て道を作り中畧男の面をあら〜〜き
 りの漆小紙以て編笠の角の上と〜をう〜女
 あり〜帽子をう〜て面を〜〜ありたの中畧後面の〜

ある物をつくり付て目計りをあそむるに及ぶものあり亦此の
 男の小神の裏を知りて或は紅の肌衣を神に奉りて統をまゝに
 計りて多ひくゆるひりぬるのぬく目も如くして標の裏に
 おくを多しめり下畧足六實永の以て元福の以て風の儀を云
 是なりその以婦女の塗蓋小神の纏箱六尺被きまは中は草の
 足袋末のひ山東の肉背草集来奇跡考下つまひり
 ○八水随筆云世に素袢の袖を切て上下小にくりて八松永
 正始するに事よく人の習ふ麻上下の裾を切りて遠
 うね事あり裏付と下へ小短遠の葉の給はるる小性小始りて
 せしき一とあり弘まりて今常袢とまきり夏の肩衣小物を用
 る事と松平重州侯より始る織子肩衣小裳を用ひて小始
 遠及度二男政尹よりまるりて又老人雑活小へ編は村まかへこきぬ
 肩衣

せんたふま このをすりさんてう
 半橋の辺湯籠山公小始りてあり

○本綿屋は袋今の製法の如くありて是と衣の母始りて製葉の
 介ありて時をせしめし中老人雑活小見へえり

○谷原名紙紙其常家品實永中大和村長并澤南生を連て
 江戸へ中向に後永小後
 まで行く大為多所方是の澤清も此時江戸より昭慶之
 年迄全所へあり後永小居るも子孫代に江戸小居る

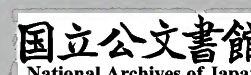
○實永の頃大傳了町の豪家始りて某家の婢女とけりて人の
 仁慈の志厚く朝夕の服葉葉菟か食ふつたおをえり人小絶

一は身へるもの残もて又八流の隅小細を編てたまり物と
 合へ常小株名あるものありてあるも或は比企野ありて何が一
 じ若湯殿山へ糸流一は身の大目如葉をねせんるを致ひり小

己が形を看ん^みとあらに戸小越きて往久間某の婢女たけを扱
 けし^ひつきの雷^{かみ}の昔を世あり波家ふりつり水女を遣しを後世
 女の念仏三昧^{さんまい}ゆゑ大進^{たいしん}の事をてりつりつる後世久間の親ぞく
 る^まは某とて大日如來の像を遣し^まつりつる湯殿山^{とうだん}黄金^{こうごん}等^らふ納む
 こを世ふお竹大日如來と云^い
往久間の墓の傍に石塔のあり光院ありに後
 在りうりのにあり後某の昔世ありにけり
 彼等の水盥^{みづう}の今も光院
 下りぬめくありや
 ○寛永のに池^{いけ}蘇^そといふ郡傍町小治をてりつる
つらん集りて音遠ひよるつらんやせり今もつらんひて
 氣遠の同名とままり此池蘇と名まると踊るらんふ吳形ふら
 人の笑ひをうらむ○む後葛^{つづみ}麻^あの七人^{ななび}湖^{うみ}を佛とて江戸大森を
 瀬^せ漕^{そう}とてさるおねれつらんやせり彼池蘇と名ふ知らんとい
 池蘇を佛ともよびけりといふ世も流るなり

正保元年 甲申 十二月十六日改元

正月廿日清影お除意を幕外重繼^{しゅうぎ} 坊上ふ不澄^{ふじやう}盤^{ばん}を彫
 ○寛永年中^{くわんえい}津^つ砲^{ぱう}向^{むか}于^を沼^{ぬま}百^{ひゃく}石^{いし}の方^{かた}の地^ちを掃^{はら}ひ細^こ村^{むら}の漁^り人^{びと}なり
 今^{いま}年^{ねん}二月^{にげつ}漁^り船^{ふね}を建^たせ^り奉^{ほう}玉^{ぎよ}の名^なを以^もつ細^こ島^{しま}と号^{なづ}ふ奉^{ほう}國^{こく}
 の養^{やう}上^{じやう}神^{しん}位^い者^{しや}明^{めい}神^{しん}を奉^{ほう}祀^しに
 ○上野^{じやうの}小^こ島^{しま}眼^{まなこ}大^{おほ}作^{しや}堂^{どう}御^{おん}建^た立^た
以^もつ未^み美^み眼^{まなこ}大^{おほ}作^{しや}堂^{どう}の
 僅^{わずか}名^なあり ○青^{あお}山^{やま}結^{むす}草^{くさ}院^{いん}軍^{ぐん}劍^{けん}
 ○二月^{にげつ}町^{まち}人^{びと}の長^{なが}刀^{かたな}者^{しや}銀^{ぎん}足^{あし}純^{じゆん}紗^{しや}の合^あ羽^う守^{まも}正^{せい}法^{ぽう}止^{とど}り又^{また}保^{たも}勢^{せう}大^{おほ}山^{やま}宗^{そう}
 布^ふ衣^いを穿^きてつるふある事^{こと}を信^{しん}ゆふ
 ○五月^{ごげつ}十九^{じゅうくにち}日^{にち}琉^{りゅう}球^{きゅう}人^{びと}東^{とう}解^{かい}
正^{せい}徳^{とく}金^{ぎん}寺^じ王^{おう}の
 玉^{ぎよ}改^か王子^{おうじ} ○徳^{とく}朝^{あそ}治^ち元^{げん}年^{ねん}あり明^{めい}之^の以^もて
 一^{いっ}統^{とう}以^もつ^て本^{ほん}佐^さ所^{しよ}六^{ろく}丁^{てい}尾^び長^{なが}池^{いけ}者^{しや}居^い始^{はじ}り二^に代^{だい}目^めより後^{のち}山^{やま}村^{むら}
 長^{なが}古^こ史^し所^{しよ}と改^かむ
正^{せい}徳^{とく}に年^{ねん}ふあり昔^{むかし}居^い所^{しよ}以^もつ終^はり



○十月十八日若菜宗基人彦月甚古悪の死六十九今も河内雲光院
下墓あり○十二月廿六日明人兵宗親率二車棧上行き下墓あり
明彰の乱を避て来り一人あり○二十三日半堂秋り人ら昨彼後より
搬入る古悪の交代にくたりの完初半を焼くものあり
麻原の古悪と号し今も未焼せり

正保二年 乙酉 五月間

二月十五日月赤くして丹の如し○二月廿二日田文坊を帝園宗通
世して空仁と号しけり廿一才ありて卒
後世の改世の初に墓あり
東之山の中親成院あり

○冬年込湯松七宗制岳山正房祥所
延基宗公危たり
○金工平因氏祖送仁率其長中朝鮮令より七宝流一の法を傳へ人々
○大島居氏於社を率府部康不愛中後句を得在都末の龜戸村
し宮居再貞に

同三年 丙戌

○十二月十一日東海寺漫居和尚寂
世壽七十三之危頻小遣僧を法
師等をもて其の法を傳へて寂

十月漢去兵乱未止明の解於平戸一宮
鄭其遠と云
本邦へ後世を傳

○冬年込湯松七宗制
○金工平因氏祖送仁率其長中朝鮮令より七宝流一の法を傳へ人々
○大島居氏於社を率府部康不愛中後句を得在都末の龜戸村
し宮居再貞に

同四年 丁亥

二月六日小塔遠く度率
友系政一菴繁の号宗甫今年六十之身之宗親孤山菴小
菴に古田織部の人茶送同利の人和舟いた泉がれらの
○四月十九日夜月の暈は方月影の如く曉の月には現る
あつた

○四月廿日官医督迪院園奉去治法市率
度尾祥雲と
し菴に

○五月十三日江戸大地表上神大佛の像壊破し○七月廿二日氷降
大井
○九月十五日刀劍同利本屋庄在悪の終
織田宗正一人あり

○十二月十二日 台命ふより王子村小治に松平藩刀頭大退物

真行あり この場は正徳十二年十月十日に平塚藩の退あり

○十一月 眞福某子と後向山比流とて 正徳十二年海法下造とて首長及海乃子とて乃流小退一とありと云

此年間記事

正保申日向山崎河山の瀬沼を藩刃より大坂へ送せ大坂より京

下也此は内室士山崎角と名付一りの大内小止ありひ面内無

之唐松の之種ハ正徳二年の以武江小下とてまより 播磨一とて

乃尔ふてり ○大橋を常盤橋と改めしれハ正保の始にあり力富

○十河ひさひとて歌をぬく事とて十河辰とて小武家の人の以

はきとていひかゝる事とて又此時代迄芝雲歌謡を好む在流乃

名所記ふりハ祭を由由の言小橋りしつゝこゝとていひハ由由の言

とハアんとてねさせしるを以ハ詞ありとて

○世事終むは時代京室町候の久吉徳種の時を賣始むと後

之傳市仲字實徳子の中嵐是を創製とて江戸小ての世の大好菴

齋中書右馬とて始とていふ 身尾唐のあゑもハ實見文中室町丁目一若虎云

自水といひの女形池見世をおけこれ池店のお祖ある下とありつゝのさくら未詳

實見池正保の既ハお繁立の更中時とてハ格別上下ともハ幸美き男の髪小池とて

○實見池正保の以長流より唐本の高人初京屋本とて所といひの

江戸をよめり池の場小治と始て古書籍の賣買をよめ 後大書籍

小治より見古本賣買のようめとて

○或は家の西流小正保申中江戸國の官本ありとて城を廣一と

後若南若梅本執司治致込ふりとて大川を流りとて市中の景

寛永の國小治一守中津藩を治る所を越後庄藩の藩士下赤
が居あり日本橋の箱とぶらうらん塚ありあり管中二浦坂の辺二浦
と越後助及庄藩ありと東叡山に東向小門あり門外并七段下浦正
町中りあり

慶安元年戊子 正月四 二月十五日改元

慶安元改元ありしを

改年の法慶安徳の天下也 平井ト養

○春荒蒲山小亮朝院七面半室基あり 寛文十一年今の如く
言申りあり

○谷中地命院七面文勅清 辰山日羽上人二尺の房身丈七面三寸のり
系路一室中不獲一板を蔵し一室社を創と云

○四月十一日天海僧也と慈眼大師と号号をあり 寛永の系編法苑珠林の元

○日光山二十二回浄土法念法華八條あり あり

○五月男色をむこひ不厭美尻犯する事を禁せしむ時行某
庶務といふ英お年の事と付強勅及ひし者若く拘治る

りり男色の事此ときより止寛文の頃より又行せしむるあり

ありて止しりり同書ありり 昔の方云ふ男色をなす及尻を時道と云ふは
流及と美尻の及尻及と尻席の及と云流及

あつてを 美林兼次と
云人寄附に

○九月女因幡稻舂社建立 美林兼次と
云人寄附に

○江戸中風呂屋の遊女法創禁あり

同二年 己丑

日暮里諏訪明神社造営 是と六終の系
初ありしと云 ○大塚善門山大慈寺造創

○二月日月持時より尚浪平 日十七年一本慶安
三年日月七日云 ○麻疹流行也

○六月廿日武蔵大北震江中武蔵町屋浪平死人恒多人数 上野
大仏

○五月十三日河越大敷障 寛永廿二年小八
早女入り美尻

○八月廿日江戸大地震 ○九月琉球人乗碇正徳興志 川王子之日光山へ参詣

安二年 庚寅 十月国

二月山王権現社 泚城内より権町へ移一説は寛永七年小移りしも以後万治二年今の所極せり

○男女修勢きうせう字まご届へ参詣する事行今云おろげ

○二月廿二日夜江戸大地震あり ○三月十二日狭容懐隨院長そとごがえ在場

死そとごがえ人そとごがえは不給そとごがえ灸そとごがえとそとごがえいそとごがえとも終そとごがえくそとごがえとそとごがえてそとごがえさそとごがえうそとごがえあそとごがえるそとごがえはそとごがえ埃そとごがえ暮そとごがえれそとごがえ今そとごがえもそとごがえ候そとごがえ系そとごがえ源そとごがえ空そとごがえ七そとごがえふそとごがえありそとごがえ昇そとごがえ舞そとごがえ岐そとごがえのそとごがえ年そとごがえ田そとごがえをそとごがえ吊そとごがえりそとごがえ

○六月二日法國毛長路長 ○六月二日より淺茅子親長名長至長山長普長法長修長

○琉球人乗碇 ○仲井絨起 ○八月七日秋父郡多大風大お大氷大降大

女より
十女位

同二年 辛卯

東叡山 泚宮泚造營

二月月依持後世をあらわす造り
一を泚再建あり一とりの

○二月十二日特時山雲率六十二 ○秋深川八情六十二あ六十二て六十二解六十二を六十二思六十二の六十二法六十二

或やぶさめをやぶさめうやぶさめへやぶさめ流やぶさめ編やぶさめ了やぶさめ真やぶさめ行やぶさめ始やぶさめるやぶさめ ○中村劫ねきまち之ねきまち帝ねきまち甚ねきまち所ねきまち稱ねきまち宣ねきまち町ねきまち今ねきまち根ねきまち町ねきまち

うあるあ ○十一月廿九日あ中あ井あのあ堂あ敷あ殊あ休あせあるあ

○十二月廿七日あ中あ井あ蔵あ敷あとあ日あ長あ上あ人あ寂あ

此年間記事

酒あ飲あといあのあ事あ行あるあ慶あ安あのあちありあ大あ塚あのあ地あ黄あ坊あ持あ次あ池あ上あのあ大あ塚あ丸あ

慶あ源あをあいあてあ収あ名あせありあ大あ酒あのあ米あ粟あをあ結あひあてあ酒あをあ香あしあ事あありあ

之あ類あ案あをあ記あしあるあ水あをあ記あしあるあ冊あ子あありあ

亭あ海あ考あふありあ又あ川あ泚あ稻あ稻あ田あ泚あ廣あ子あ孫あるあ廣あ孫あらあるあ孫あ七あ合あ入あのあ事あありあ中あ小あ押あさあるあ孫あ給あありあ

○寛永永り米粟あのあ以あまありあ令あ根あ木あ智あといあのあ事あ泚あ河あ町あ支あ留あ町あ乃あ

今年玉川の上水を都下へ通して荒度の用を充たぬ

○玉川上水のをくぬの方甲及丹波山の幽谷を護り同玉丹波村を

こつて武蔵の慶長郡ふらぶ甲及一の原より多津浦村と七里橋まで

羽村まで十二里までより六十と十六里計りて羽田浦より海へ合は

九年 兼夜元年の春玉川に古堤の築清を造りしりその水より羽村

より海へ通すの事を考へ同十月上旬上水は堀割の儀を命せし

おれり翌己未初夏より仲みふ至り羽村より江谷大木を延堀後

虎匠門まで玉川の水を掘りてとてと後徳方武蔵方市中

へ分水して日用とす虎匠門外玉川管轄の地は玉川

○神田上水を園に事へて始に武蔵編年集流ふ大久保

東天に中ふ 長命を交へて水道を考へしり多摩川の水を

小石川より引りぬきしりて利神田上水のなるありしりせんせう

ふいば石橋を築きしり此池の水よりしりて石橋ありて兼夜元年より

玉川を助るありしりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしり

兼夜元年よりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしり

善徳寺ふくじんがきやうよりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしり

兼夜元年よりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしり

兼夜元年よりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしり

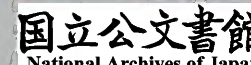
兼夜元年よりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしり

兼夜元年よりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしり

兼夜元年よりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしり

顔を見せに息女七才に後他人小まゝに是女計付並若おの
 時にお後面をうらふに後唐の以迄の志人わう橋元うのきを以てあつた
 一より五治のほゞり江戸中止む大火のり後あつた人のよふ玉おと
 りの著をうむり五治中流もむぶちと編纂を年りるは寛文乃
 以不松坂といふは定室の以不熊谷蓋おもそらあつた年り八か
 巻を年り又天和の以貞享の以より編纂止るは定室のあつた
 上下其不著蓋不流の云々○大身は格別小身の人の侍流上下とも
 上より又と橋計とて役を以て歩けりる人もあり又六橋の
 二尺の子扱を以て辨是扱一ける人もあり中間も一寸ある人も
 一々ある云々
 昔くおろり不は時世の風俗事なるは
 能りを事下りて世人の知るべき事なり
 ○福毛成中丸子村羽黒持徳の天正中の勧学なりといふ兼徳の以英政令海の事

小舟三流といふは中の中うは中風を以て是あつてり歩けりるは齒落て云流か
 以終
 并非人と成この不あ味り一うの社を以りてふ思儀の具流を以流るは齒立地中
 以歩自在とあるよりて内社中は以て流を以て又指人一非前あつた
 江戸兼を柱の流人系流群集のりるは一より一は後唐三年江戸大火の
 後自
 終りといふ
 ○兼徳二年刊行の江戸圖不撰の流と今小柳町の不あり
 濺草法門内了喰町の辺不雲光院弥勒寺の所念の流と今小柳町の不あり
 流と流安をせんといふト教教と日輪と知是院をり林田川の今云
 新といは橋をいふんといふ橋林田橋を大炊及橋といり日本橋西の
 といふ南橋町迄の町屋の内後原源五橋といふは
 橋といひこセイフン言琳派流橋といふのあらん通一丁目あり
 本より同二丁目あり
 今春七ありとありといふ水を八号町又作川町の水も八号町有山玉
 流流所今の辺あり流城橋辺より南ハテ橋迄を流



教字ありしを燔く一移りてを跡大抵武部不為り

明暦元年乙未 四月十二日改元

梅翁が集小年号改元の事目

明暦や梅のあはれをよびしるすか

とりよあり改元は四月ありりや

○下管正燈寺宗刺関山慈堂和尚 和尚の寛文元年正月朔日寂八十 數明主大田空經國師と遠居をある

○玉川上人今年もより金ヶ嶽就せ中津田同善不也

○市谷平安寺月桂寺とありしを○六月廿五日於本寺之卒 社九 古丈

号ふ末乃人信宗 正俊翠屏越新副使秋滝瑜陽後事 有龍翼旅宿本寺持ち之韓人日光山お指を

○十一月十二日医師板板ト森卒 名如春後系寺中一医至院小森寺を林院智權 是一碑六修長院ありト森ハ後系神利也

の辺小文庫を建和淨の書籍を収め 同ハ以後系流傍町の小裏小堀田加州彦 法人小堀トむこれを後系文庫とりよ

の法下中起ありは内ハ夫あり土を造りて内ハ和淨の寺教芳老を

狩へらる世不後系文庫と稱しるるなり

同二年 丙申 四月

正月廿二日夜赤雲ありあり○正月廿九日ひせのり自己の在る不
ては家の老いおびさるもの若しかまきりたると命を

○後系寺山門の仁まこの以波を驚ると世不云ふ一も後系

を事と○六月赤雲ありありの年のおく小二年あり

○六月廿日より親世系美初近能身行 外田橋方 田屋の裏

○陽系寺於て新後

坪の地を日本橋の辺 千束の内 田地あり あてりよまは引料とて今まを

小町割十 あまら 下さるる旨命せしる○十月十六日夜長後町よりお火水風

流く中橋南銀治町橋町辺敷焼

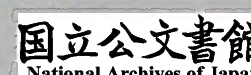
○十二月十六日茶人令森雲乃及彦率 公長通号宗知

明曆二年 丁酉

正月元日に谷竹町火事 二日赤坂町火事 五日吉祥寺辺中町
 火事 ○正月十八日乾大風来刻より幸以て町裏幸妙とあり火
 陽津神田を渡り津門河町通町筋篠倉河津京橋八丁地
 界隈を西後炮海海手佃島深川を以て翌十九日己刻より石川河津
 京新野通町より焼中一牛込出町田安出町神田橋出町常盤橋出町
 吳後橋出町八代河津大島小沼野崎寺尾橋出町等焼亡又同日吉
 町 麹町又丁 目つき とうり火あて 幸野出町の弁橋田鹿出町出雲宮下橋上宮門
 前札の辻海多まで焼亡此後焼亡万石以上の庄屋あり而も隊宇法旗本
 七百七千隊宇組一組を救救を志し以て聖社之音平隊宇町を

四百町行町八百町焼死人十百七子に千六人といひ後て幸野中
 二町に方の地をぬひ非人を一々死骸を船まで運りぬ塚に集て
 寺院を建てて山無海を回向院と名けりありぬ 去年十一月
 高年正月
あかをぬきあか一日小公て大書院承價一冊
 けを掃して積民の困苦を志し路小悲運に 正月廿二日とうり七日の石火災小
 幸野に別荘あり小幸野所へ小舟で粥をぬきたり又町中へ銀子
 幸野共賛同 金ありて十六万ありにるふ
 幸野を以て賑ふ八分うといふ を下しぬきたり 因獄の罪人を火の附放
 たりぬこの時より始まる
とうりむきあか
 けりんえうり

視昔集 江戸田原の後飯小庄をあらうひまか人をむをんて
 とくせいのあいはむ世のなかの事きつしは吉川惟足
 正月下旬吉原町小庄掛を命せしむ 小屋
 昆陽 一事跡合考ふこの時一具を市の内今の跡物
 ちの跡を以て遺地とて其一を福中とす
 六月今の地引りうり新吉原町と号し八月より商賣をせむ



明暦二年四月尾板の江戸鈴屋の内えき原六丁二丁すこ町系町新町の名ありて
揚屋町の名あり一里いえき原二丁に言の地を今の地すこ町割揚ふりて代地をのり
し原すこ町の向ふありふ町をひききこりてふ町の中ふ二割三割あり
揚屋を二つふありて揚屋町とあつしこりてえ地の辺にふりて新町は
町新波町とふ名目あり
ふりてふ町系原とまき
○二月廿二日羅山先中率
七十廿才横墓公墓乃
列業ふちとえ原十才
○大火の後江戸中町系丸葺を掃せしむ
山伏町系原

此年同記事

東本願寺新田明林の下加賀原をこ唱つる地のあるありて
中津原今の地へ移りし
大火の後
あつし
紀後原の由中一丸花房町の西へ田宿市原の由を委ありてふか辺
皆武家原なりありあり
○武家原とつる若狭ふ
此原の大火の
事とせしむ
とつり柳系と町を二重りのけられし事二重は人ふるを以て東西十町

あつり小土をを築せしむ日本橋の南ふ町とりに日市迄の町を
あつりのあつりにあつり小川場よりあつり心とけ東本願寺町はふ
とつり又日本橋より系揚まで八町のみふ町を二重を丸のけ
今所よりあつりあつりあつり是ハ町原原りふせきありて徳人のあつり
とつり入込中もあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつり
あつりあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつり
あつりあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつり

○大火のあつり日本橋通に下れ北の側細き道を五輪町とつりふ所ふ
墓を他る上居りあり
○災後茅場町より一葺高賣のあつりあつりあつりあつりあつりあつり
始の以本所より同へ移りし事とつり本所茅場町よりふ

○世時武家の鷹野後轉多一又寺院も西替あましく有る様あり
あると橋より釣込橋また橋田松吉様と橋より因ら表門のありありなり
寛文より元福迄この江戸番おもを祥と橋とある

○靈山より江空寺法祥寺のまも湯治小をくく大火後漸くへり川原

瑞林寺昌平橋より谷中へ橋の敷地を八丁敷とて法華寺天藏院あり

院日福寺今の毎葉
橋の西へ 世頼寺今の小
押込 非田より法華寺聖徳寺天藏院あり

○世時代今の如き天倉を南へり又山より法華寺後今松山乃

門より始て菜飯豆腐汁黄湯大豆をくくしてとあると名

はけいかせを江戸中場より今松山のあまや喰ひ小田ん

とて縁の形あり一丸も小真一とあり

○浅草貝附前を屋敷五十年傍世屋利を述くりお船者も始り

猪牙船を創り山音通ひの家をくく又所よりとあり

ありて通ひもゆりあり舟海考より船の系級小妻一
その日のと
ゆりては柳とありこれくそをきとあり

○菜植より小咽兼踊とあり還綴紙料より一ははね舟
菜植をうの山へのうけめ

○昭應二年山崎富弥の遠遊紀行小鈴之舞小舞あり

つらありとをを將け不し声鈴のわを以人倫をくあり兼意

のひまもありありん○単曲柳川檢校八橋檢校行る八橋ハ寛文
の末小舞号

○昭應三年の江戸園大坂町今大橋町二丁目
うら橋とあり 阿比の町今小舟町
三丁目あり

あり非田橋堀町の浅井幸若とまとあり

万治元年 戊戌 十二月間 七月廿二日改元

正月元日夜市谷安養寺と世秀登のまふ白衣の老翁形を
和舟を誦一白瓶とありとありとありとありとありとありとあり

より異流著しと江戸妙子ふりたり

○正月十日幸々之りめより火引續江岸大羊焼亡を方城

○二月本換町海自赤坂小日向等築地あり年止は藤山と築土のあり
小日向築地の時この山を

引田を地敷をあつりけること 四月十五日時時素川後改率廿二

○六月九日篠尾是順死申村劫三郎
がえ祖あり ○夏二田の地小命は彦彦別

莊の地をある地地へ後辺鑑る老朽小住一着而跡なり別鑑極と

移るも去く松樹を植う遠遊を標せり寛文十二年夏弘文院城
敷之や田舎の記を施る

○程么降藩氏寛永中花子の程より名を譽へ後通世へ

道付と号し楊梅鑑泉と鏡つ此の辺并程一口の鐘を鑄く

と然る本堂再建の額を記し又池の中并赤才天の小廻を

建たり今年七月廿七日七千餘方ホく流るり洞房後室
并之り

○八月江戸中盤結株一町小まきとあり八百八株小室の梅ふ江戸町

板八百八町といふ事此時代の事寛永のありめがうあり
八百八町の事と記せり 今六十百町町小

及なり○今年日本橋法普法塔九○九月十三日唐僧臨元禪師

拈及普門より江戸府小東より一州湯治禪祥院小七十餘日迄

あり災族群集この時敷
六十五 ○深川海濱寺寛 剎尾山強
元程作

○同淨心寺寛 剎尾山日
義上人 ○日暮里經王寺寛 剎

○去山崎園齋義江戸小遊秋為多遠遊紀行あり

○今戸村百姓九新寺が男九新助加仲のそふあり編為社を

寺系後以是を九新助信為といふ○九月明の案原國性こくせん 命

鄭成切奉部えん 後を法名は芝屋又森宮といふ今年三十九才
あり 日暮の寛文六年不率也

○東海乃名不記寛 文寛 中寛 板寛 引

万治二年 己亥

正月二日より二月廿四日まで火災百廿五戸あり流人安堵あり
ありーーー 至嘉永本正月十二日 ○日本橋を掛返らる 武平本若く藤吉の橋を立し

○二月山崎雲斎翁再江戸遊八月帰京以再遊紀あり

○三月廿一日水田子堀山王権現社今の

地内造営今日内遷あり 舊地内堀堀ゆりて其後後の内庭となり

○七月二日大風為甚 後平内流二儀あり下り浸る

○九月深草元法法師母を候 身延山不指ける次不江戸

死の身延紀 万治二年

九月五日述上 九月五日述上とまうてくる上人管仲(おのり)とて記す

日本橋邊日本秋 更無一事掛心頭 今宵新見江城月

影満扶桑六十州

せききふ並居てつま あつて唐のやまとのつまらふふんつ

ふささくまてふま あつて神の思ふむささの月

うたあつて あつて

月もま あつて

○中谷永昌とふ中谷長者 長者町に居る の墓とてありと光院夜本参

玄安居士万治二年亥九月廿九日とあり年号新しけし銀一

けきと長老の子孫おとの墓あり

○新田川堀割の事他意慮へ命せしむ今年由普法塔の形年
あいら大川より柳東通り由茶のあしより約込吉宿より舊地側より
外込より清和郡古地堀が来りて大川へ通流く成る 以揚土を以小石川
小日向小築比お
為家表地と流はあふ赤城郡新下より同白ふ初里まで田畑あり江戸川に
小石川へ接てあり飯田町下の堀とあり江戸川の堀田ありしよりあり

○今年より年所河川狭地堀を築きをひくき河をせり橋
をりて武田郡おし由之ありしは後天和二年回向院へ今の
清重と云ふ賣店の通り町屋計跡りしは亦年下の武士地町屋へより
て元の田畑とあり元禄元年又昔の在り武士地町屋とあり

○十二月霊巖も深川へ移るは海町屋とあり
以地所一田屋をせす
半橋あり社のみ
今よりあり

○十二月五日吉原二浦屋の名妓を尻死轉芸妙女伝女と云
まり

山登春夢院小墓あり又同西の方よりありて万治三年とあるは誤なり権世とむ風あり
ゆるゆるの如きあり 是より後寺屋のあり山登の寺の如きあり又柳亭の翁
の尾考二冊あり ○今年より江戸町へ新道とありあり

万治三年 庚子

二月十日十八日大火あり一中村を焚き小りあり

○吉井安念院七面宮再建 ○本年回向院再建之儀 以唐丁厨焼至十万余
一人の死骸を棄り

一言を刻しあふ信堂とあり小なる若日秋を小念院を唱へ塚上宗洞像の形像を造り安念
一又山門を造るあり二世住職とありこの山門元福の火災不灌り今あり開けり
は師代ありの如き 幅は長九十九寸あり
楹は長九十九寸あり
楹は長九十九寸あり

○兩國橋造りて概 幅は長九十九寸あり
楹は長九十九寸あり
楹は長九十九寸あり

題 兩國橋

鷺峯先生

杜梁新建枕長流 人是陸行吾在舟 疑似猛竜横卧勢

武江年表卷之二

廿五

總州為尾武為頭

○本挽町立丁目小森田を所立高始て芝居真行後代に初伝と号伝

○五月霖雨あり○九月廿五日は基所二世大橋宗桂二本板上行と云卒お茶酌形の傳

○むぎあがき二巻梓行此傳大火の子を祀せる也此のの旗子と云り

此年間記事

上野小令銅二丈二尺版の大仏の像は唐万治の以本食洋雲再建也

○芝の日は若狹為社初法此の年宇と云ふ

○大久保法堂と七面宮初請○明人陳元寶波國の札を遊せんらんあそ

本邦へ来り江戸と田舎町へ来り山必馬と小偶居おけいまを海人

後村七赤を職員次所者馬の浦と次を馬と小落りけり明人せん人を

捕りぬありぬを疫やみを見る小まろくありとりの人ぬぬを

○寛文元年 辛酉 八月閏 己月廿五日改元

○正月十九日の初光相ありぬ一ありぬを光相軍町初めけり一

天豆のまろー○正月廿七日齋通町より火火大の迎能治橋宗橋の辺

本挽町まを委家方町屋敷く焼亡○勅進相模せんじんすま今年より毎年

續く真坊と○二月より浮勢宗廟うきせうそうまう男女老若とる事殿

○二月十二日林漢耕稼しんかんかうか卒二十八名を務り三子兼養して春種と号伝

○正月年号改り一時

ふあつたつちをねんうーのひねりなつちうふんふんふん

并海考ふか川を角う又
東のすさひあつづー

○六月今更ふ本川を新橋を東へ改法番西深川に小建橋小津川

に片移さる○秋五十年末の豊作と云

○八月三ヶ領懐遠ふ統く共うる事を守りし

○十月廿八日江戸大火あり一は徳川と云ふ物も焼あつた

○十一月二日浅草堀田某侯藩内信州参り火を以てあつた後

焼亡

寛文二年 壬寅

遊く松崎今年より七日小九拂是年十六日○正月舟難波の重續衣

一や
深衣用いま一又る事深ふせり此行とるるを信ゆひ又幕府町の
河原ふま一りせん後茶屋とりのりのを信とらゆる

○正月廿八日先祖古尊り作年九十五古尊めき實歴のああり平次氏
あじう代く古尊を以て氏と

○三月廿二日刻大地震○五月六日より廿日まへ日月赤き事初の

あつて○九月年岩仙桂江東吟共幕候○九月廿二日小若こふ結るに

竹の若葉あつてくはる青江岸増く定規建川

○九月麻布つ本松小増上るふん退隱の地あつた

○江戸名所記撰行七巻源井り市村り右通源ら海ら
りる元元のねえと興りく世ふりる

同二年 癸卯

正月廿二日後七代顯宗に十五○五月天下小令いんく殉死を止め

○六月十五日清系小徳谷安方ら稽為社勅情

○羅山文集刊行 百五十五卷六十年 ○飛戸で満宮今の地(宮邊橋)の
心字の池及橋等は年八月祭礼神樂引市の儀武寧府の例に於て本年の
地を巡りて橋白集ふ不而安島もの形くく成る時

○本朝編年録を本朝通鑑と改めぬ
○八月十五日 飛塚海士の羅山念三和尙伴四子及後子
念三昧を
念三昧を

○今年より天和二年より飛戸村を築
平安方度との洞佛を鑿りて漆る也云信小耳白くく後交く
飛戸中流渡あり 楊梅白集 江戸市西流渡あり 一す凡や此類

寛文元年 甲辰 五月圓

○賀賀屋八幡交修費 ○服田町法務船入令せしむ

○けんせん葛巻切始價八孔 ○七月七日連舟所里村玄俊率五十

○赤村中々懸石川を橋おた元光芝居具好一續担云引幕大

同五年 乙巳

正月五日連舟所里村法眼玄陣率七十

○秋絹布の長廿二丈六尺小窓くく ○八月青高人生體の古記を新じ

く月せくく信くくまきく市仲く令せしむ

○八月多敷の医師立野春翁江戸へり紀行あり鎌倉紀行を

合くく二書ふくく一集くくまき市儒學又右殿のゆえ
あり令家解ゆび人字ゆせり

○霜月宮をよま由門跡由下向の時陽田川あり

帰るされ冥府の里小窓もあれすくく川原のありぬ極ふ道見親と

○徳田隆秘録の要を括て云江戸本挽町小大和を庵と云医あり

又同町小舟を二舟長谷川助重とくく小舟人彼を菴并

廿八

廿九

三十

三十一

三十二

三十三

三十四

三十五

三十六

三十七

入魂一人くのが入魂といふ事御宿男女の嫁姑等の行状にて御物を交せり或は法慶の息女縁色の事御宿をうまひ下りぬくみをおせり一うはらふ事御宿に寛文六年八月迄御宿を其はより一御宿をたひ人をきき菴といひけりといふ

寛文六年 丙午

二月廿六日人形のおとど光おちあふおとど

○ふしのふせ石受取施の傍配施 ○東叡山鐘樓建時の鐘

○津村幼三郎うせ居申お漏をとりお漏

○九月一日林梅洞奉二十に才 名敷号梅洞幼亭 後年春後と稱す

○芝金杉海多百餘石の地を細千場と澤原一同十戌年九月町割ありて新細町といふ

同七年 丁未 二月閏

二月府中六所宮法再建

○四月花弁大納言下向の時南田川あり

多はたの地をきて隅田川子流はよりくふ船人 雜波中

○五月梶井宮隅田川内遊覧あり

おとどんちり御まていりて地を遠き隅田川

○七月の末吉川僧侶御神道の学をりて 戸をさる僧侶の氣は神道崇 御宿をりて

御宿を築 奉西の社院跡の故神植不かりて新ひけり

神植のおひひりて老のまき立ありて御宿

あやかり奉の承をりて御宿を治る世のまわり

を御宿あり社地を御宿より一水室中ののみなり社地といふ事比の神社あり一奉所の地むり本座とて一を元祿元年奉西の文字ありて一御宿あり元とて是也

かのうらふ不幸のときろとあめりあすす
はひより幸而くせしと知れり

○月黒直指院揚巻室に道入者

直指院の揚巻とて来食の
聖あり念佛の暇仏を刻

あやこたもこみ子侍の安並に同室を不慮を結ひ世末の人をしく念仏をすむ寛文六
年二月被宿舎の始明年十月廿日被せせんを知らず人小岩く又西やり
乃心鬼ありて世の中のをを感し一妻子を被直指の寺にありけり
降せんとて被せせんといふ今年十月十八日十念をうけしに障障大具と成て虎の腹
を挿んとて剣をもち穴小入指人念佛の言とせも小土を被入て斤所小置む又揚巻
と十月廿日小岩く念仏被返小岩ひに十七日小岩く眠るるを被せしに中道に
さるの友系指巻集せり事録しり

寛文八年 戊申

正月廿八日乾の方より聖の方小等さその雪白乳立夜に消滅

○二月朔日未上刻牙込酒井家いん下庭あり火出えん菅崎町いん徳

士町ち市谷田町ち小岩同日又市谷天龍寺寺内より火出納戸同ん

庭ありいん同ん庭あり上深堀堀坂武家方六番町いん火出いん五番

町二番町いん徳町一丁目より六丁目まで橋田辺徳彦山庭ありいん山

ありいん小辺をいん火出いん橋まで徳辺をいん又上庭のありより

火出いん渡河邊辺神田橋鎌倉河邊日本橋まで焼亡いん方の火の

一筋いんありいん町庭いん焼いん又同日又町庭いん谷竹町

よりいん火出いん大庭ありいん○二月二日日輪二ツありいん見

○同日辰いん刻いん橋よりいん火出いん大庭ありいん焼いん赤坂町

日いん庭いん火出いん二田寺所いんありいん焼いん又同日午いん谷東坂よりいん火出いん下谷法徳寺町いん庭いん徳寺いんありいん本

所いん火出いん一二の橋所いん焼亡○同日未上刻小日向いん徳地いん去

家いんよりいん火出いん新町身込門の内いん入北筋焼く田安法門

のういんちいん入又柳系いん庭ありいん火出いん本庭いん道町版田町いん庭いんありいん

坂巻まで焼亡 古二日の火事本武家屋敷二子百勝町屋百
二拾七町勝寺院百廿九字百軒屋敷百七軒とあり

○二月吉原廊内より新芝をひく丸塚町伏見町と号し
伏見丁六
年寄の
古屋あり ○二月町人帯刀する事を禁せしむ
名つけしむ

○二月幕末由下向け時
虎を井
雅章公
月夜も林原ありて作き見ゆる雲を雲ろの雲と名を號し

○夏徳忌昇ひかり ○四月より協定出の源く
是を六段の
はつとり 虎の出つと
幸指出ののりく新橋を掛く

○羽宿より半室山坂坂村并土中を穿ちて合像五寸の観世
あつち
ゆふ
高をほりて背少刻して弘長二年二月とあり里人まらを
嘗て安あんち重ちゆう中ちゆう夕ゆふ敵てきの觀世高是なり

○十一月十三日後八代即系率 三十一 ○歳事本實文八年江戸小世二番の
観言札不始りて大洲丸船小男女

○昔くお徳おまむの宗徳又ふとくおては十八教五日
歩行後おまむ
と清くれとま
万日の回向極とく人集はる事あり 實文中申年お終りとあり

實文九年 己酉 十月日

二月に日陰茶十五堂焼亡 ○二月二日流星アウゼ東より喜慶の如く

○奉公人が掃り二月二日ありし今年より二月八日と改る

○飛戸三満宗社地不法焼坊を初清一社を営む

○七月振夷人札をあら十月までお松前侯より平おあり

○七月十八日俳人石田本將率 八十勝や後系
世終り下葬 ○八月十日大地震

○大洲河原おちあらい演氣鼓吹 宗後人依る久大馬の寺并茶た馬の川
宗雲京市大馬の寺あり

○軍学志山鹿甚五左衛門 名ハ素行 恨人あり 寛文中津を犯し古くは後村彦

の郎小幽せし是迄室二年小死り先一返さる 貞享己丑九月十六日也也て 徳の身延宗冬冬に葬を

山麻流十八郎の おと編輯あり ○江戸あまの代八車を他る八人の内小代りあまの

世事流流 神共あ大八といふのふる川橋元とあり一以土をまふ 事をはりこれ大八車といふ今も利する事と記り

○始く元結を創製 案の一本あ水板六本木のふり麻布へりて板の下あて文七元結 と名物の元結を掲ぐといひ世の終り文七といふ元結

小指の後の下の名ありといひり新梅子小文七ふまるとなほのうづつといふといふ元結 文七といふ元結のこのみといひり元結の名を述ぶ製一人の名ふりいひあるへ一其角の草切町

の行指の隔より元結 を製する事よりあり ○世時代男侍達六方組等あり保貞十左衛門あまの

軒首ありといひり ○大の頃徳治所末将末孫加友一貞心友藤子

吟市等ありといひり ○降達前 降達ハ宗貞の孫あり世ふありと 元和寛永の以てあり一花とてと曲

○江戸より治り探井丹波探 和歌山 金平が 虎座水軍近江を文治森土佐探

薩摩外紀長門探不見探 紀茶探等あり 海より小唄の事ハ予が 声曲歌纂よりいり

○春繪残魚釣の事江戸ふ知る人ありといひり 寛文中上総の

の船政丑大刃仁兵衛といひり 寛文中上総の とんせうむせ 船政

とんせうむせ 安永三年 下年 小いり

○大の頃俠客の額を披上る事一行き一あり 浪士の宗因江ふ

あり一財原貞十左衛門の額を披上りて「公日月や東さふんよう此

額まき 是廣く披上るありあり唐大びびひの唐大指をまき

額つきよりあり但一指を傍の兼意のありありか一古

巾着小まき指しりつる ゆはころの男達あり

○寛文中十一年より十二年迄行ける遠邊を平らに江戸國有 五枚片 分川

水新増約込雜司岩あり青山浪若あり痛みあり日本橋

武江年表卷之二

南二丁目経路加多塘板とあり
郊外をかし
こまに
た

武江年表卷之二 畢



